



やわらかく、
芯のある



torit

俺たちは最強の家族だ。

穏やかで優しく、芯のある言葉だと思った。それはこの本の全体を包む雰囲気と同じだ。しかし、この言葉の裏には一見平穏に暮らしている家族には考えられないような残酷な、許しがたい事件があった。そんな事件の当事者となったものが果たしてこのような言葉を口にすることができるのであろうか。

いや、それができる人間だったからこそ彼の次男はこの世に生まれてきたのであろう。春。彼は少年によってレイプされた母が身ごもり、生んだ子だ。家族の苦悩は計り知れない。春を生む前も、生んでからも、生まれてきた春自身も、毎日心にある複雑な重い、重い、闇に苦しめられ葛藤してきたと思う。そんな家族の長が、春の兄、泉に「春のことをどう思っているのか」と問われたときの言葉だ。

この本を包んでいるのは、この父親の存在だと思った。不思議な人で、彼がシリアスな場面で発する言葉はどれも真剣なのだけれど軽く、気持ちがいい。

「本当に深刻なことは、陽気に伝えるべきなんだよ。」これは春が言った言葉。この言葉はきっと、「楽しそうに生きていれば、地球の重力なんてなくなる。」という精神に通ずるものであろう。ちなみにこれは春の母が言った言葉。

私はこの家族の話を読むたびに、胸に温かく強いものを感じる。この本はミステリーであるけれども、それ以上に家族の物語であると思う。単純に家族愛が描かれたもの değildirと説明したくないほど複雑で重く、だけれども強く温かい、うん、やっぱり愛の物語だ。

この父親が私は好きである。こんなお父さんがほしい！というよりは、こんな風な生き方がしたい、彼のような精神を持って生きていきたいと思える人物である。

どんな残酷な事件も、深い苦しみも、決して消し去ることのできない憎しみも、彼の言葉によって救われる気がする。

彼にそんなことを言ったら、「俺はそんな大それた人間じゃない。ただのミステリー好きのおっさんだ。ついでに癌だしな。」とか陽気に言うかもしれない。

そしたら私は「そうだね、癌なんて最悪だ。早く治しなよ。」とか陽気に返したい。私を取り

巻くこの重力の中で、一瞬ふわっと浮ける気がする。